

日本科学哲学会第 49 回大会

2016 年 11 月 20 日 (日) 9:45-12:00

ワークショップ

推論の自然化へ向けたアプローチ：実践的推論と認知科学の接点から

オーガナイザー・提題者 小口峰樹 (玉川大学)

提題者 西堤優 (東京大学)

提題者 文景楠 (東京大学)

推論は、表象内容を備えた心的状態に対する合理的な操作を通じて、結論となる何らかの項を生成する過程である。われわれ人間は高度な推論能力を備えることで、他の動物にはなしえない複雑な思考を実現し、それに応じた柔軟な行動を遂行することができる。こうした高度な推論の実現に言語が重要な寄与を果たしていることは言うまでもない。しかし、認知科学や神経科学における推論研究は、われわれが日常的に行う推論が、言語や記号を用いた論証のように逐次的な操作を通じて行われるものであるよりは、はるかに並列的かつ多様相的なものであるということを示している。日常的に推論が行われるとき、脳内では様々な情報が並列的かつ同時に処理されており、心像や情動のような非言語的なものを含むさまざまな表象が利用されている。こうした経験諸科学における動向を背景に、推論の心理的・神経的なメカニズムを分析することを通じて、推論の自然化を行おうとする哲学的なアプローチも登場している。そうしたアプローチにおいては、推論のなかでもとりわけ「実践的推論」が考察の焦点となる。

実践的推論は、一般に、価値的な内容をもつ項を含む前提から、「こうすべきである」という結論を導き出す推論のことを指す。実践的推論をめぐっては、伝統的に、「意志の弱さ」などの非合理性に関する問題をはじめとして、実践的推論と理論的推論をどのような点で区別すべきかという問題や、実践的推論における規範性をどのように理解すべきか（実践的推論の妥当性を評価しうるような規範的な事実は存在するのか）という問題、実践的推論の帰結は何なのか（行為か、意図か、あるいは規範的な信念か）という問題など、多岐にわたる問題が争点となってきた。

上で述べたように、近年、実践的推論をめぐって、その進化論的・発達心理学的な位置づけとそのメカニズムについて、動物や幼児を対象とした研究領域が活況を呈している。たとえば、比較行動学的な視点から推論を理解しようとする研究者は、実践的推論をいくつかのサブ機能に還元し、その進化論的な道筋を付けようとする。あるいは、神経病理学的知見を取り込んだ研究者は、伝統的には理性に対立するものとして考えられてきた感情

が、実は実践的推論の不可欠な構成要素であることを示そうとする。これらの実践的推論のメカニズムの探求は、推論の自然化における新たなアプローチを示唆している。

本ワークショップでは、こうした研究動向を背景として、三人の提題者による研究発表により、現代における実践的推論の研究動向を概観し、認知科学との接点で浮上してくる問題を分析する。文は現代のアリストテレス解釈から出発して、実践的推論研究の歴史的背景と現代との接点を描き出す。西堤は実践的推論において情動がどのような役割を果たすのかを二重システム理論を基に論じる。小口は比較認知における動物への実践的推論の帰属に関する方法論的問題に対して分析を行う。